

本棚 ぶらり

山を読む

秋から冬にかけて、
山は紅葉から雪景色へと変化します。
そんな山の様々な表情を伝える本をご紹介します。



ヒマラヤの彼方から
ネパールの商業民族タカリー生活誌
飯島茂著 日本放送出版協会、1982年



「白き神々の座」と形容される大ヒマラヤ山脈が東西に横切る国ネパール。国土は北海道の二倍程度の小国ですが、南側の水田稲作を中心としたモンスーン地帯と、北側の荒涼とした高原が広がる遊牧地帯とは、全く対照的な生活様式が営まれています。

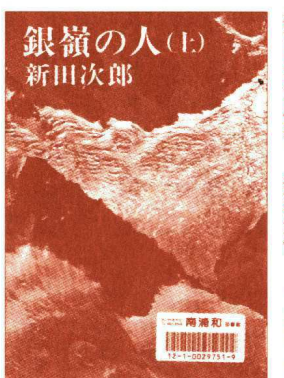
国の中央部を北から南に向かつて流れているカリガンタキ川流域の渓谷は、羊やヤギを利用したキャラバンに絶妙な交通路となつています。この深い谷間を根城としていたのが、少数民族ながら南北の仲介交易によりヒマラヤ屈指の豊かさを誇ってきた、タカリー族でした。

しかし、1959年のチベット事件により中国がチベットの支配権を握る時代に入ると、タカリー族の貿易は大打撃を受けます。故郷を離れたタカリー族は、カトマンドウなどの南方低地部の諸都市に移住してからも、往年の商業民族としての資質を生かし経済的には成功をおさめます。が、あまりにも急速な都市生活への適応は、山中に生きてきた民族としてのアイデンティティが喪失する危機につながっていきま

す。複雑な民族構成の小国であるために、インドと中国という大国に挟まれ動静を左右されてき

たヒマラヤの国、ネパールの来歴が、タカリー族の営みを通して、よく分かる一冊です。

銀嶺の人 上・下
新田次郎著 新潮社、1975年



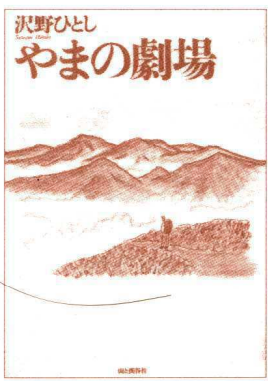
『銀嶺の人』は『孤高の人』『采光の岩壁』(ともに新潮社)につづく、ヨーロッパ・アルプスを舞台にした新田次郎の長編の第三作です。

女医をめざす、勝気な、泣かない子、駒井淑子は、冬の八ヶ岳で単独行を試みて遭難しかかった時、若林美佐子と出会います。鎌倉彫の新鋭彫刻家として注目されていた美佐子は、無口ですぐに涙ぐみ、死を覚悟した二人を事もなげに助け出した三人の男性登山家に魅入られて、彼女たちは、ついに初の女性隊による、マッターホルン北壁完全登攀を成し遂げます。その後アイガー、グランドジョソフと、ヨーロッパ三大北壁に挑む淑子、新婚山行を下りユー西壁に試みる美佐子……

医師と彫刻家、仕事を持った二人ですが、ますます岩壁登攀に青春をかけていきます。

対照的な二人の女性登山家の姿を通して描かれている山への情熱。本書は、「山とはなにが、山になぜ登るか」と読者に問いかけてきます。登山に対する興味が湧いてきたら、身近な山から登ってみてはいかがでしょうか。

やまの劇場
沢野ひとし著 山と溪谷社、1999年



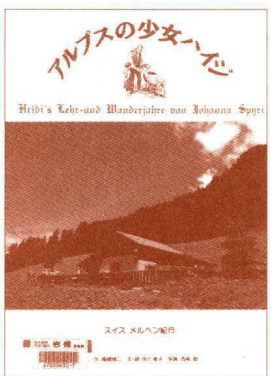
国内外の山登り紀行を中心に、18編からなる紀行文でまとめられています。「記憶に残る山」「きげんな山」「ほろかなる山」などに分類され、各編が数ページ以内で収められるなど、どこからでも気軽に読み始めることができます。

その内容は、百名山などと呼ばれる有名な山だけではなく、標高数百メートル程度の、人のあまり行かない低くて静かな山にも及んでいます。季節も春の花の時期から冬まで、また、気候も晴れだけではなく、霧や雪もあるなど、自然の山の姿をそのままに、楽しさや辛さ、その奥深さを伝えてくれています。

著者は山登りを楽しむのではなく、山旅をするのだといえます。スケッチブック持参の山旅で描かれ、随所に挿入された水彩やクレパスの絵は、楽しさであふれています。また、必ずといっていいほど絵の中心には著者と思われる登山姿の人物が描かれることから分かるように、山の自然を、旅の楽しみを客観的に描き出しています。

抜けるような青空に、雨や霧。短時間で刻々と変化する山の雲を人生にたとえ、喜怒哀楽をその著書の中に表現したこの本は、多くの山旅を重ねてきた著者の、山や人生への思いが凝縮された一冊です。

アルプスの少女ハイジ
スイスメルヘン紀行
高橋健二監修・文 矢川澄子訳・文 西森聡写真
求龍堂、1992年



『ハイジ』(福音館書店ほか)はスイスの作家ヨハンナ・シュペーリ原作の児童文学です。おじいさんに引き取られた少女ハイジが、スイスアルプスの広大な自然や山々に囲まれ成長していく姿が描かれます。日本でも1974年に放送されたアニメが大人気で、現在もCMなどでよく目にするおなじみの存在です。

本書は、『ハイジ』の舞台スイスアルプスの写真紀行です。アルムの山々をはじめ、山小屋や花畑など、ハイジが愛した風景が美しく切り取られています。大判の写真には、『ハイジ』の物語の文章も添えられています。雪を頂いた山や、緑の間から顔を覗かせる愛らしい花々の姿を見ていると、ハイジになった気分が味わえるかもしれません。

また、作品解説や、作者シュペーリの紹介なども掲載されており、ハイジについて詳しくなることもできます。『ハイジ』を読んだことがある人も、アニメでしか知らないという人も、全く知らないという方も、本書を読んでハイジの世界を旅してみたいかがでしょうか。

大人も楽しめる 絵本のせせ

第2回

花さき山
斎藤隆介作 滝平二郎絵
岩崎書店 1969年



今回のテーマは山。前回紹介したのがかなり変わった絵本でしたが、図書館員としては今度こそオーソドックスな絵本を紹介したいところ。そこで今回は、多くの人の心に残るロングセラー絵本『花さき山』を取り上げてみることにしました。

山菜を取りにいき山姥に会った「あや」。一面に咲く美しい花を前に山姥は、「一つ良いことをすれば花が咲く、命をささげれば山になる」と話し始める……。

このシーンに登場する八郎や三三は、秋田の八郎瀧やオイタラ山の創生を描いた創作民話絵本『八郎や三三』(共

に福音館書店)に登場する主人公たちです。斎藤隆介と滝平二郎の絵本は、他にも数多く出版されていますが、その多くが、創作民話絵本というジャンルであり、山が舞台だったり、山の創生の話だったり、山に関わる話が数多く出版されています。誰もが認める代表作『モチモチの木』(岩崎書店)にしても、峠の猟師小屋にジサマと暮らす臆病者の豆太が、ジサマの急病に勇気を振り絞ってふもとの村の医者呼びに行き、モチモチの木に火が灯る場面(山の神様の祭り)に遭遇するという話で、実は舞台は山なのです。人々の身近にありながら、信仰の対象ともなる山。物語の舞台になるのも必然なのかも知れません。

斎藤隆介の作品は小学校3年生の国語の単元で今も取り上げられていますから、昔も今も子どもたちが良く知っているお話ではあります。しかし、絵本はやっぱり絵本で、勉強とは関係のないときに、絵と文の織り成す抜群の「コラボレーション」を楽しみながらじっくり味わってもらいたいと思っております。